

第6分科会

小さな発見から大きな学びへ ～身近な自然の中から見つけた たくさんの発見に着目して 子どもの主体的な学びを探る～

発表者 平井裕子（鳥取第五幼稚園）

湯村里可子（鳥取第五幼稚園）

指導助言者 前田恵子

（鳥取県教育委員会事務局小中学校課指導主事）

司会者 山下芳江（鳥取第五幼稚園）

記録者 西山佳音里（鳥取第五幼稚園）

坂野敦美（鳥取第五幼稚園）

1. 発表の概要

（1）主題設定の理由

近年、核家族化による保護者の就労やメディアの普及等により、家庭での遊びが変化してきている。保護者への「子どもの遊びアンケート」の結果からも、習い事や大人の都合で遊びが制限されていることがわかった。また、自然との関わりについても手軽に類似体験ができることから、安全管理の整った自然体験パーク等で過ごすことが増え、自ら自然との関わりの中で発見する喜びや、興味をもったことに夢中になる遊びの経験が少なくなっているように感じている。

本園は、園周辺に公園や田んぼ等があり、年間を通して四季折々の自然に触れることができる。また、園庭では草花や虫と身近に触れることができ、風や光、におい、音など諸感覚をフルに働かせながら、全身で自然を感じて自然との直接体験をすることができる。

しかし、本園の子ども達の遊びに目を向けると、自然豊かな園庭が目の前にあっても興味が薄く、自然の中で遊ぶ楽しさや自然の不思議さを感じる体験に結びついていないという実態があった。また、目新しいものに興味関心が移りやすいため、試行錯誤しながら遊んだり、じっくり遊び込む姿が少ないと感じた。

子どもの生活の中心は遊びであり、遊びを通して多くのことを学び、心身の発達を促すと考える。そこで、園の利点である広い園庭・恵まれた身近な自然の中での直接体験を通して、子ども達はどのような気づきや発見をしているのか、そのことが、どのような主体的な遊び(学び)につながっているのか等、子ども達が主体的に遊ぶ姿や小さなつぼやき、共に遊びを共有している友達との会話の記録を探っていくことにした。また、子ども達の見取りをよりよくするための記録の取り方の工夫や、指導計画を見直し、反省や評価をもとにどのように改善していったらよいかを考えていくことにした。

（2）取り組みについて

「身近な自然との直接体験を通して感性豊かに感じ、気づき、発見し、試行錯誤しながらじっくり取り組んでいく経験の積み重ねが、主体的に学ぼうとする子どもを育むであろう」という研究仮説を立てて、仮説をもとに以下の3つを具体的な取り組みとし、研究を進めてきた。

①身近な自然との関わりの中で育つ力について考える

本園では身近な自然との関わりの中で育てたい力を、「健康な心と体」「人と関わる力（協同性）」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」「知的好奇心の芽生え」「自立心」の6つの観点で分類することにした。また、「身近な自然と関わる年間活動表」を作成し、教師間で共通理解を図り、それをもとに保育実践を行ってきた。

②身近な自然との直接体験が子どもの気づきや主体的に遊ぶ姿にどうつながっていくかを考える

自然遊びマップ「えんていあそびマップ」を作成し、遊びの共通理解を図ることにした。年長児がグループごとに園庭にいる虫などの生き物や草花、泥団子づくりに必要な土や砂の場所を書き入れ、一つの大きなマップに仕上げた。

また、平成27年度～平成28年度の保育実践事例をもちより、職員間で話し合いを行ってきた。

③記録や指導計画を工夫したり見直したりするなど、実践事例をもとに改善していく

学びの視点一覧表を作成し、実践事例から見えてきた幼児の姿を育ちのキーワード（育てたい力）をもとに評価することにした。また、週日案の見直しと改善を行い、幼児理解を深めるために日々の保育を振り返り明日の保育につながるねらいや活動内容を考える。

(3) 実践事例

事例1 『園庭に生えているよもぎ』 2015年度2歳児～2016年度3歳児1学期

◆みつけてみよう◆ 2015.5

<ねらい>・教師と一緒に草花（よもぎ）を見つけて摘むことを楽しむ

<育ちのキーワード>興味・関心・探求心・期待・発見・喜び・気づき・共感・模倣・要求・意思の伝達

<考察>園庭で日頃から触れている草花の中から、教師と同じ草を見つける目的をもつことで、自分で探そうとする姿が見られた。また見つけた時の喜びを教師や友達と共感することができた。この時期（2歳児）だからこそ、自ら気づかせるために実際に触れて知ることを経験する援助が必要である。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・実体験を通してよもぎを知り、教師と同じ草（よもぎ）を見つけたことを喜んでいる。
- ・よもぎが身近な園庭に生えている事や食べられる事を知り、よりよもぎに関心をもっている。

◆食べてみよう part1～よもぎクッキング～◆ 2015.5

<ねらい>・教師や友達と一緒によもぎ団子作りを楽しむ

・自分たちで摘んだよもぎで作ったよもぎ団子を食べることを喜ぶ

<育ちのキーワード>興味・疑問・不思議・気づき・喜び・共感・好奇心・驚き・要求・期待・意欲

<考察>よもぎを身近なものに感じ、団子作りの工程を見守ったり少し手伝ったり、友達や教師と一緒にする経験が喜びや食欲につながるように感じた。そして、次への期待感をもつことができた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・実際に食べてみてよもぎが食べられると気づいている。
- ・教師や友達と一緒にクッキングをしたり食べたりすることの楽しさを感じている。

◆遊びに取り入れてみよう～色水遊び～◆ 2015.6～2学期前半

<ねらい>・教師や友達と一緒に水遊びを楽しむ

・色水遊びを楽しむ

<育ちのキーワード>欲望・要求・不安・安心・意欲・喜び・興味・関心・気づき・期待・模倣

人との関わり・共感・協力・集中・感動・共通の目的・思考・試す・比較

<考察>教師のやり方を模倣しながら集中して遊ぶことができた。自分で比べて感じたことを言葉で伝えようとする姿が見られた。また、友達とのやりとり、関わりを育てるというねらいについて考えてみると、一人一人が十分に遊びを楽しむためには、人数分の用具が必要であることに気づいた。初め戸惑いを見せていた子どもも友達の遊ぶ様子を見て関心をもち、自ら遊び始めることができた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・自分で用具を使って色水を作ることを楽しんでいる。
- ・色が出るものと出ないものをあえて取り入れることで、繰り返し試行錯誤を楽しんでいる。

◆食べてみよう～団子クッキング～◆ 2016.4

<ねらい>・よもぎに気づいて摘んだりクッキングをしたりすることを楽しむ

・教師や友達とよもぎを見つけ摘む楽しさを伝え合う

<育ちのキーワード>探求・発見・気づき・人との関わり・自信・興味・意欲・関心・期待

<考察>年少組に進級した子ども達はよもぎに親しんできた事によもぎの生えている場所を知っており、すぐに見つけ摘みはじめ、新入園の友達に教えてあげる姿も見られた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・よもぎ散策を楽しんでいる。
- ・進級児は友達に自信をもって伝えている。

《まとめ》

- ・2歳児の子ども達にとって、何もかもが初めての経験になるため、教師のしかけが必要である。
- ・「自ら気づくこと」よりも「知ること」の方が多いこの時期だからこそ、「知ること」につながる言葉かけや援助が必要であると感じる。また、実体験をすることで学びの積み重ねのきっかけになる。
- ・友達や教師と一緒に経験することで、興味関心が広がり自分でやってみようとする意欲がもてる。
- ・試す、比べることを遊びを通して経験することができる。
- ・2歳児のやりたい気持ちにすぐに対応できるよう、教師の援助や物的環境を整える必要性を感じる。

事例2『カタツムリ』 2015年度3歳児～2016年度4歳児

◆あじさい公園へ◆ 2015.6

<ねらい>・教師や友達と一緒にカタツムリを見つけることを楽しむ

・かたつむり探しに興味をもつ

<育ちのキーワード>探究・期待・発見・驚き・疑問・意欲

<考察>あじさい公園でカタツムリを見つけることはできなかったが、その後教師が捕まえたカタツムリを見ると、気づいたことや驚きなどを言葉にする姿が見られた。子どもの気づきや思いを見逃さないように、意欲に繋げていきたい。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・興味関心をもってカタツムリを探している。
- ・実際にカタツムリを見て思いや気づきなどを言葉にして教師や友達に伝えることを喜んでいる。

◆カタツムリの飼育◆ 2015.6

<ねらい>友達と一緒にカタツムリの飼育をする楽しさを味わう

<育ちのキーワード>意欲・興味・関心・気づき・喜び・人との関わり・喜び・達成感・意欲・楽しさ

<考察>カタツムリに興味をもち、飼育をしたい、餌をあげたいという意欲を感じられるようになった。

カタツムリが何を食べるのかを家庭でも話し合い、野菜を持ってきたり教師のしている様子を見て、友達と一緒に飼育ケースを洗ったりする姿が見られた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・カタツムリの世話に興味をもって関わり、家庭から野菜を持って来てあげることを楽しんでいる。

◆カタツムリのうんち◆ 2015.6

<ねらい>・カタツムリのうんちに興味をもち、飼育を楽しむ

<育ちのキーワード>発見・疑問・探究・興味・関心・予想

<考察>カタツムリのうんちの色が想像とは違う色でとても驚いている様子だった。普段あまり興味をもっていない子どもも、実際に見て感じたことでカタツムリへの興味が増し、感動体験の一つになったと思う。子ども達が疑問に思ったことを自ら調べられるような環境構成や教師の援助の必要性を感じた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・うんちの色の変化に気づき、興味をもって図鑑で調べながら、飼育することを楽しんでいる。

◆カタツムリの冬眠◆ 2015.12

<ねらい>・カタツムリの冬眠について知り、興味をもつ

<育ちのキーワード>発見・喜び・探究・自信・優しさ・好奇心・意欲・満足感

<考察>図鑑では、カタツムリが殻の入口に幕を張る（カーテンをする）ことを知っていたが、実際にその様子を見つけた時は、すぐに教師や友達に知らせ、クラスの皆で驚きと喜びを共感し合うことができた。今までクラスで飼育してきたカタツムリに愛着があるからこそ、「寒くないかな？」と心配したり、冬眠の準備をしようという優しい気持ちが育っていったと感じた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・冬眠の仕方を知り、実際に園庭で必要なものを見つけ自分たちで冬眠の準備をしようとする。

◆友達と一緒に◆ 2016.4

<ねらい>・友達と一緒にカタツムリを飼育する楽しさを味わう

<育ちのキーワード>自信・意欲・人との関わり・疑問・興味・関心・好奇心

<考察>進級児は今までカタツムリの飼育をしてきたので飼育に自信をもっている。進級児の子どもも飼育をし始めた頃は教師の姿を見ながら飼育を行っていたため、他の友達に教える時も自然と言葉だけではなく、実際に手本を見せて教えていた。教師の関わり方の大切さを改めて感じた。

<ねらいから見た子どもの姿>

- ・友達同士で教え合いながら飼育することを楽しんでいる。

◆カタツムリの卵◆◆赤ちゃんが産まれたよ◆ 2016.6

<ねらい>・カタツムリの卵が生まれることに期待をもちながら、飼育することを楽しむ

- ・赤ちゃんをみんなで観察する楽しさや喜びを味わう

- ・愛情をもってカタツムリを育てるようになる

<育ちのキーワード>発見・喜び・驚き・愛着・不思議・優しさ・探求・好奇心

<考察>子ども達は卵や赤ちゃんが産まれたことに驚きと喜びを感じ、より一層カタツムリへの興味が増したようだった。年少組から継続して飼育してきたからこそ、カタツムリが子ども達にとってかけがえのない存在になってきていることがわかった。教師と一緒に活動しながら、子ども達の発見や驚きなどを見落とさないようにし、その時の思いを共有していくことが、一人一人の心の育ちにつながっていくのだと感じた。

<ねらいから見た子どもの姿>

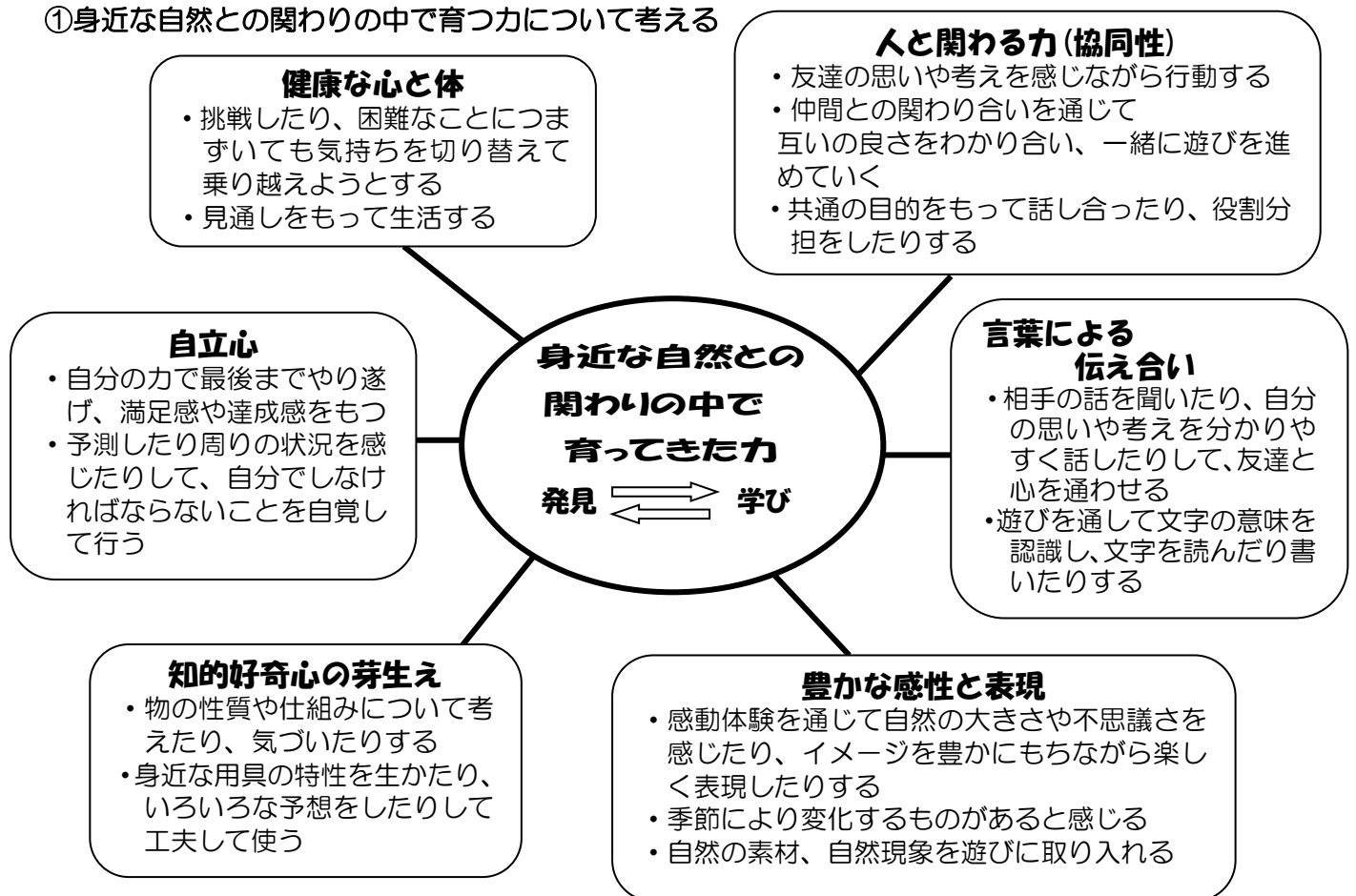
- ・毎日のように飼育ケースを確認し、卵が産まれることを楽しみに待っている。
- ・産まれたカタツムリの赤ちゃんを優しく育てようとする気持ちをもつ。

《まとめ》

- ・初めて生き物の飼育をする子どもが多かったため、教師も一緒に飼育に関わり、疑問を調べることで子ども達の意欲も増した。教師の関わり方の必要性を感じた。
- ・日々飼育をしていく中でカタツムリへの愛着が増し、大事に育てる姿から自分の仲間かのように関わる姿が見られてきた。
- ・飼育をする中で、普段活動に消極的な子どもが積極的に家庭から野菜を持ってきたり、カタツムリの様子を言葉にする姿が見られるようになった。
- ・子ども達にとって一つ一つのカタツムリの変化や発見が感動体験であり、探究心や好奇心につながっていった。今回の事例から、日々の生活の中で子どもの気づきやつぶやきを見逃さないようにしたり、疑問や喜びを受け止め、共感したりしていくことの大切さを改めて感じた。

(4) 成果

①身近な自然との関わりの中で育つ力について考える



②身近な自然との直接体験が、子どもの気づきや主体的に遊ぶ姿にどうつながっていくのか考える

- 直接体験をすることで、子どもの興味や好奇心が膨らみ、自ら遊びに取り組む意欲がもてるようになった。
- 継続した活動の中で、不思議に思ったり疑問に感じたことを、調べたり挑戦したりするなど、探究心が育ってきた。
- 活動の喜びや試行錯誤した中でのつまづきなどを、友達や教師、家族と共有していきたいという思いが育ってきた。
- 教師は、子どもの疑問や不思議に思う気持ちに共感し、それを深める援助を心がけ、子どもの心の動き(好奇心や探究心)に寄り添った配慮をすることを意識するようになった。

③記録や指導計画を工夫したり見直したりするなど、実践事例をもとに改善していく

- 次に子ども達にどのような力を育てるか、そのために教師はどのような援助が必要であるか等が明確になり、次へのねらいが立てやすくなった。
- 記録をもとに教師間で話し合うことで共通理解でき、保育実践に生かすことができた。

(5) 今後の取り組み・課題

- 今回の研究を通して、主に遊びが個人やグループ、各クラスでの活動に偏っていたと感じた。遊びを伝承していくためには、クラス、学年の枠を越えて異年齢の関わりを深めること、また、教師間でも連携を取り、共通理解を図ったうえで、遊びの保育計画を立てていきたい。
- 長期的な遊びを積み重ねることが、考える力(思考力)や想像力につながることから、一日の保育の流れを工夫し、じっくり遊び込むために時間を確保していきたい。
- 子どもの主体的な遊びが明日の保育につながるために、週日案の形式を工夫しながら、ねらいや活動内容を考え、保育を進めていく。

2. 研究討議

(1) 発表に対する質疑応答

Q. カタツムリの飼育を長い時間かけて行ってきた中で、子ども達の気持ちが違う方向に向くことはなかったか。また、その時の教師の言動や周りの友達との話で気持ちを盛り返すことができたことの事例はどのようなものがあるか。

A. その子どもが何に興味をもっているのかを探っていくとともに、教師が子ども達に「今カタツムリはどんな様子かなあ」と投げかけ、クラスみんなでカタツムリの飼育を行う機会を作っていくことで今日まで活動を継続することができた。また、いろいろなカタツムリの絵本の読み聞かせを通して、「あ、こんなこともあるんだ！」とカタツムリに興味をもつ子どもの姿も見られた。

Q. 週日案の形式をどのように工夫してきたか。

A. 身近な自然と関わる遊びを深める為には自由遊びの時間の遊びにねらいをもったり、見直したりすることが大切だと気づき、1日の振り返りや保育メモ（気づいたことや遊びが明日につながるようなメモ）が書ける保育記録の欄を作り、自由遊びの子ども達の姿や大事な部分を書き込めるように形式を変えた。振り返りをもとに次の日のねらいを立て、保育を継続できるようにしている。振り返り、次につなげる週案となるように改善しているところである。

Q. 学びの視点を根拠に研究を評価している点が非常に新しい。その中から出てくる次の保育への展開の予想に確証をもって保育に取り組んでいた。遊びの評価は、学びの視点一覧の縦軸（育ちのキーワード）・横軸（活動・日付）をもとに、どのように評価してきたか。

A. 学びの視点一覧をチェックし、活動ごとに読み取りをすることで、毎回育ちが見られた部分と見られない部分が明確に見えてくる。週日案と一緒にチェックし、手書きで書き加えて遊びを深めていけるようにしている。

感想. 実践事例が細やかだった。自然を生かしたスケールの大きい立派な発表だった。学びの視点を参考に、自然以外の活動でも取り入れてみたい。

(2) 全体討議

『子どもの主体性を伸ばすために今、取り組んでいることは何か』を研究協議の柱とし、8つのグループに分かれて以下の4つの視点について「田の字法」で討議をした。

- ①主体性を伸ばすために自園でやっている取り組み（具体的に意識している点・工夫している点）
- ②やりたいけどできない、うまくいかないこと
- ③その理由、問題点
- ④解決できそうなこと

(各グループの討議内容のまとめ)

- ①主体性を伸ばすために自園でやっている取り組み（具体的に意識している点・工夫している点）
 - ・リーダー・当番活動や発表・質問タイム
 - ・自由遊び・園庭での遊びの充実
 - ・やりたいことはなるべく制限なくさせる、子どもの意見を取り入れた遊び
 - ・スケジュールや時計を用いて見通しをもった生活をする、生活の流れのパターン化
 - ・段ボールを使った遊び・お店屋さんごっこ
 - ・栽培活動、飼育活動
 - ・愛着関係作り、布や新聞を使った感覚遊び（未満児）

- ・異年齢での活動
- ・造形活動、ゲーム遊び
- ・ノーチャイム（一日好きな遊びをする日を設けている）
- ・子ども同士で相談する時間を設ける
- ・環境構成の工夫・充実、教師の仕かけの工夫
- ・つぶやきや行動を観察し、共感・共有する
- ・パーソナルタイムで個の充実を図る（選んで遊んで片づける）・自己選択活動

②やりたいけどできない、うまくいかないこと

- ・自ら遊んでほしいが、子どもが教師に確認をしに来る
- ・準備の大変さ、時間が足りない、時間の確保ができない
- ・興味が他へ移り、遊びが継続しない、発展しにくい
- ・年間を通した連続性のある保育ができない
- ・行事等で保育が途切れる
- ・0歳児は保育者から離れられない
- ・縦割り活動ではそれぞれの学年で楽しむことが難しい、充実しない
- ・子どもへの対応の難しさがある
- ・個別の学びの見取り

③その理由、問題点

- ・カリキュラム、行事などにより自由に遊べる時間の確保ができていない
- ・バスの時間、降園時間、一日の流れ等で自由に遊ぶ時間に制限がある
- ・遊び込む時間の確保ができていない
- ・発達の個人差、経験の差がある
- ・興味をもてるような環境作り、場作りができていない
- ・教師が保育を決めている
- ・遊びの内容が単調になり、マンネリ化している
- ・異年齢の遊びでは各学年の環境構成の違いがある

④解決できそうなこと

- ・保育計画、カリキュラムの見直し
- ・行事の取り組み方や内容の検討
- ・学年間、教師間の共通理解、声かけの明確化
- ・自由時間の確保、計画性、見通しをもった計画
- ・教材研究、環境の見直しをしっかりとる
- ・時間を有効に使う（朝、帰りの自由時間等）
- ・保育者がどのように関わるか、向き合い方の振り返りをする。また、長いスパンで個々を見取る
- ・子どもの遊ぶ姿を捉えて声を拾う
- ・絵本の読み聞かせ
- ・友達を通じて楽しさを知らせたり、子どもと一緒に一日のスケジュールを立てたりする

3. 指導助言（全体のまとめ）

前田恵子 氏（鳥取県教育委員会事務局小中学校課指導主事）

『鳥取第五幼稚園の取組に学ぶ』

※下線部は鳥取第五幼稚園の研究につながる部分

1. 専門性を高める記録のあり方について

『幼稚園教育指導資料第5集「指導と評価に活かす記録」 平成25年7月 文部科学省』参考

○専門性を高めるための記録

記録の意義

①幼児理解を深める

②幼児理解をもとに次の保育を構想する

幼児理解（何を学んでいるのか・何を体験しているのかを見取る）をもとにねらいを立てて環境構成をする。次の保育を構想する。

③教師と幼児との関係を省察し、教師自身の幼児の見方を振り返る

④他の教師と情報を共有し、自分の保育を見直す

⑤幼児の学びの軌跡を残し、保護者との連携に生かす

○記録のとり方の実際

記録の様式と実際

①名簿に書き込む記録：一人一人の子どもの様子（どのような力がついているか）を記録に取る。継続的に記録に取ることで見えるものを大切にする。

②一定の枠組みを決めて書く記録

③週日案に書き込む記録

④学級全体の遊びを空間的に捉える記録：保育室・園庭・中庭等、空間の中でそれぞれの子ども達がどのような動きをしているかを記録に残す。いろいろな保育者の目から見た学びを共通理解できる。

⑤その他（様々な記録の方法）ビデオ・写真・メモ等：映像を記録して子ども達を見取る。

※園の研究テーマや保育のねらいにそって子ども達を見取ることができる。

※どんなねらいをもって記録を取るのか、何のためにその記録の様式を使うのか共通理解することが大切。

○記録を指導や評価の実際に生かす

1. 記録から指導の過程を評価する

4. 記録を評価に生かす

2. 教材研究に生かす

5. 記録を園内研修に生かす

3. 記録を指導計画の改善に生かす

6. 保護者との連携に生かす：掲示物、お便り、個人懇談等

2. 幼稚園教育要領改訂に向けて

○幼小接続、学びの連続性が大事にされている。

『幼児期におけるいわゆる「非認知的能力の重要性」』

→学びに向かう力（心情・意欲・態度）の育ちと、文字・数・思考の育ちには関連が見られる。

学びに向かう力を幼児期に育てることが大切

○幼児期の終わりまでに育ててほしい力の明確化：10観点

※鳥取第五幼稚園の研究では6項目を重点化

○遊びを通しての総合的な指導・・・小学校以上の力に繋がっていく

○幼児教育にふさわしい評価のあり方を検討する

○日々の活動が小学校以降の生活や学習の基盤に繋がっていることを再認識し、意図的に取り組む

○主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）

3. 主体的な学び（遊び）のために

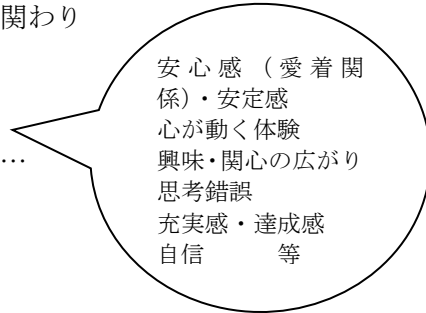
- ・やりたいことを見つける
- ・言いたいことを伝える
- ・自分からいろいろなことに興味や関心を示す
- ・自分から行動する
- ・周囲の状況をふまえて自分が何をすべきか考えて行動する
- ・自分で考えて判断して行動する



生涯にわたって学んだり集団生活を送ったりする上での基盤

○幼児の生活の中に必要なもの

- ・子ども自身が主体的に関わり
- ・感じたり考えたり
- ・発見したり試したり
- ・工夫したり操作したり…



知的発達を促す環境がいかに豊かにあるか

○豊かな体験を生み出す環境

- ・自然に触れる体験
- ・夢中になって体を思う存分動かし感覚を十分に働かせる体験
- ・「なんでだろう」「なぜかな」などの問いが生まれる体験
- ・満足のいくまで創意工夫をできる体験
- ・友達と十分に関わる体験
- ・心が揺さぶられるような体験 等

○保育者の役割（第五幼稚園の実践記録をもとに）

- ・幼児の発達・興味関心に応じた遊びの素材
- ・遊ぶ時間・遊ぶ場の確保
- ・幼児の発想ややり方を認めていく
- ・言葉で確認する
- ・考えを整理する
- ・待つ（思いを探る、言葉は少なく）
- ・「自分たちの力でできた！」と思える援助
- ・友達との関わりにつなげる声かけ
- ・思考錯誤できる空間、もの、時間
- ・教育的意図をもった援助 等々

保育者がモデルになることが大切

4. 鳥取第五幼稚園の取組に学ぶ ～記録の充実をもとに～

◎全職員の共通理解に基づく実践（P→D→C→A） 自由度のある研究が大切

◎年度を超えた継続的な記録

- ・子どもの発達の連続性
- ・同じ素材（自然環境）との関わりだからこそ生まれる気づきや学び、自信、友達との関わり 等

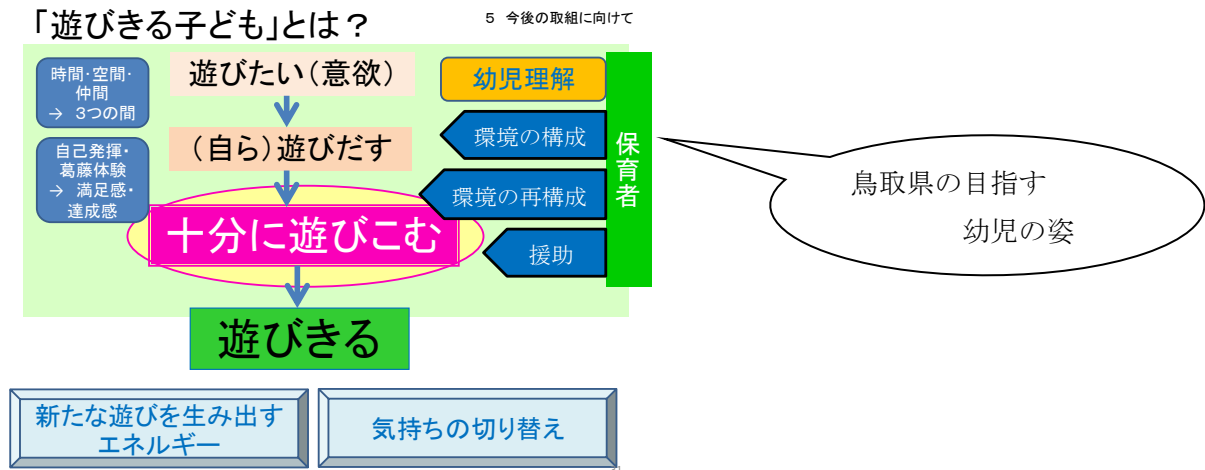
◎工夫・改善に向けた柔軟な姿勢・チャレンジ精神

○実践記録の様式の検討：検討の過程が大切

○学びの視点一覧：学級の育ちを捉えることができる→個々の育ちの見取りをするためには一人一人のチェック表が必要。目指したい姿を想定し、実践しながら書き加えていく。そうすることで次の保育の構想・計画を行うことができる。

○指導計画の見直し：短期の指導計画（週日案）の改善 ※明日の保育につながる振り返りをする

5. 今後の取組に向けて



※小さな発見を大きな学びへつなぐために

- ・経験・体験の繰り返し、積み重ねを大切にする
- ・普段の生活の中でどんな学びをしているのかという視点をもつ
- ・遊びの中でできるようになったことにはどのような援助があったのか関連づけて考える